



2015.8.20

変更、リリース、展開（デプロイ） ～用語を適切に使う～

ITIL® が日本で広まったのは 2003 年。あれから 12 年経ちますが、ITIL® はその間に広く IT 業界に広がり ITIL® の用語を **共通言語** として使われるようになったことは、**コミュニケーションギャップを少なくする**うえで、とても素晴らしいことです。

ただし、インシデントという用語はとてもメジャーになりましたが、イベントとインシデントであったり、インシデントと問題であったり、まだ組織によって異なる解釈による混乱もあるように思います。

さらに「**変更**」「**リリース**」「**展開**」は、正しい理解が難しいと考えられる 3 用語なのではないでしょうか？

そこでまずは、「**リリース**」からお話をします。**ISO9000(品質マネジメントシステム)** の中では「**プロセスの次の段階に進めることを認めること**」という意味があり、これを判定することを「**リリース可否判定**」といいます。つまり ISO9000 では、品質管理の仕組みの中で、**製品（モノ）を市場に出す（出荷）**することをリリースと考えています。もちろん、その製品リリースは品質チェックが完了して、出荷できる状態の製品（モノ）を示します。

IT の場合には、アプリケーション開発などで製造したソフトウェアに対するテストが成功して、「**リリース可否判定**」をして製品版（リリース版／バージョン 1.0 など）として渡す（出荷する）ことをリリースといいます。この段階では、**アプリケーションソフトウェアは、まだ本番環境には展開（デプロイ）はされていません。**

ITIL® のプロセスで考えれば、「**リリース管理および展開管理**」のリリース管理フェーズから、リリース可否判定した結果を「**変更評価**」プロセスに提示し、「**変更評価**」プロセスは「**臨時の評価レポート**」を「**変更管理**」プロセスに渡すことで、「**変更管理**」は、「**DLM への登録許可**」をします。つまり、**製品版リリースは本番環境に展開される前に必ず DML にチェックイン**されて、**本場環境に展開するときには DML からチェックアウト**して、本番環境に展開されます。

「**展開**」という用語は、英語では **deploy（デプロイ）** といいます。が、「**リリース**」を本番環境に導入して**ユーザーが利用できるようにする**ことを「**展開**」といいます。ITIL® V2 では、「**リリース管理**」プロセスというプロセス名でしたが、リリース管理だけでは、本番環境に展開（デプ

2015.8.20

ePlugOne

Accelerate your services

ロイ) するところの管理が明確でないため、ITIL® V3/2011 Edition では「リリース管理および展開管理」ということで、「リリース」と「展開」を明確にしています。

組織によっては「リリース」とは、本番環境に導入してユーザーが利用できる状態になっていることのように解釈したり、「展開」(デプロイ)と「リリース」を分けて考えていなかったりする場合も多いのではないのでしょうか?また、リリース可否判定そのものが変更管理と混同していることがあるのではないのでしょうか?

そして「変更」は、“サービスに対する追加、修正、削除”を示す用語ですが、設計／開発フェーズから、構築／テスト(移行)フェーズ、運用フェーズに至るすべてのライフサイクルフェーズにおける、すべての変更をコントロールするためにあります。その最大の目的は、本番環境に変更(追加／修正／削除)する際の変更に伴うリスク(インシデントなど)を低減するために、ITで作業が進められているすべての変更プロジェクトを一元的に管理して、優先順位をつけてスケジュールすることです。つまり、リリース可否判定のところだけが変更管理ではなく、すべてのフェーズにおけるすべての変更をコントロールするのです。